

第4章

KEK-UCLA Workshop on KEK Archives (2004) 報告

大林 治夫 NIFS 名誉教授
木村 一枝 NIFS 共同研究者

日 時 : 2004 年 7 月 19~23 日

場 所 : Room 1684, Hershey Hall, UCLA

訪問先 :

- ・ UCLA University Archives (Young Research Library) 7 月 19 日
- ・ UCLA Oral History Program (Young Research Library) 7 月 19 日
- ・ UCLA Liebeskind Archives (Young Research Library) 7 月 20 日
- ・ UCLA Neuroscience Archives (Young Research Library) 7 月 20 日
- ・ UCLA Center for Information as Evidence (Graduate School of Education) 7 月 21 日
- ・ Special Collections and Archives (UC Irvine Library) 7 月 22 日
- ・ Japanese American National Museum 7 月 23 日

会議参加者 :

- (日本側) 高橋嘉右、高岩義信、菊谷英司、三浦靖子、吉岡正和 (以上 KEK)、後藤和男 (VT&KEK)、菅原寛孝、平田光司 (以上総研大)、伊藤憲二 (東大先端研)、大林治夫、木村一枝 (以上 NIFS 共同研究)
- (米国側) Sharon Traweek, Anne Gilliland-Swetland, Marcia Meldrum, Teresa Barnett (以上 UCLA), Sameer Shah, Michiko Takeuchi, Ann Marie Davis (以上 UCLA Grad. Student)

趣旨と内容：

本 Workshop は、2003 年 7 月開催の 2 つの Workshop、すなわち KEK-UCLA Workshop (KEK, July 2-3) および UCLA-SOKENDAI Workshop (UCLA, July 7-8) に引き続く形で開かれた。内容としては、高エネルギー加速器研究機構 (KEK) が現在着手しつつある高エネルギー物理のアーカイブ・プログラムを中心テーマとし、核融合など他の関連分野でのアーカイブ活動の促進・拡大をも含めて、その方向を米国の研究者とともに検討するものである。

われわれは、核融合科学研究所 (NIFS) において実施中の共同研究「我が国の大学における核融合研究の資料調査研究」(研究代表者：西尾成子) の立場から、この Workshop に参加する機会を得た。核融合分野でのアーカイブ活動の今後の推進にとり参考となる点が多いので、その概要を以下に報告する。

今回の WS の大きな特徴は、1 週間の会期中の会議はすべて午前中とし、午後は連日 UCLA および近傍で、実際に Archival Activities の行われている現場を視察見学したことである。これは WS の準備に当たられた Professor Sharon Traweek (UCLA/SOKENDAI) の発案によるものであるが、それぞれの現場でその責任者から具体的に内容を聞くことができ、Archives について経験の浅い日本側出席者にとっては、今後の計画実施に大いに役立つ体験となった。

経過概要：

以下、簡単に経過を記す。

7 月 19 日午前

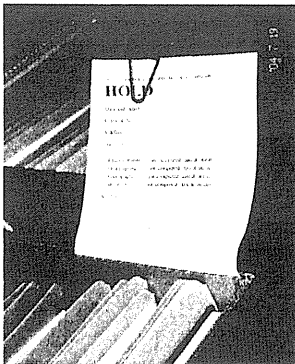
開会挨拶で KEK 史料室の高橋教授は、高エネルギー物理研究での国際協力と同じく、この Archives の分野でも国際協力が重要であることを強調された。

ついで KEK の現況が高岩さんから報告された。2004 年 4 月の機構改革の結果、KEK に公式の史料室 (Archives Office) が設置され、数は少ないが

専任の職員を含むスタッフによる恒常的な活動を開始したことが特筆される。これに続き、NIFS でのこの1年間の活動状況を「NIFS Nuclear Fusion Archiving Research (I), (II)」として大林 [(I) 概要と問題点], 木村 [(II) 具体的活動内容] から報告した。NIFS では KEK と異なり公式の組織は未整備なので、共同研究により実作業を少しずつ進めているが、実施に当たっては研究所内での認識と位置づけが大切なことを説明した。

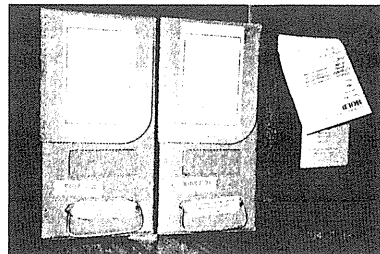
7月19日午後

Young Research Library 内で、Oral History Program の進め方と具体例について、Dr. Teresa Barnett (Assoc. Director), Ms. Andrea Maestrejuan (interviewer) の話を聞き、続いて Dr. Charlotte Brown (University Archivist) から UCLA Special Collection の実例として、J. J. Sakurai Papers (500 pages), J. Schwinger Papers (2500 pages) が紹介された。Box 中に納められた folder, notebook 等の様子を実見した。NIFS における収納状況と比較してみると、整理・分類が行き届いている点では優れており学ぶべき点が多いが、少なくとも基本的には、われわれの方式と同じ線上にあることが確認でき、大いに意を強くした。



【写真1】 J. Schwinger Papers
(付箋は資料一時持ち出しのメモ)

UCLA Special Collections



【写真2】 J.J. Sakurai Papers

7月20日午前

日本における Oral History (OH) の新しい展開について伊藤さん（東大先端研）から報告があり、それに続いて KEK での OH 実施に関する計画と現在の状況などが高岩さんから報告され、議論された。

昼食時間に Professor Mohamed Abdou (UCLA, 核融合) と Professor Sharon Traweek とを引き合わせ、席上、核融合における日米協力プログラムに Archives Work を提案する上での米国 DOE 側の手順などについて説明を受けた。

7月20日午後

Liebeskind Archives, Neuroscience Archives で Dr. Marcia Meldrum と Dr. Russell Johnson (Archivist) から History of Pain Collection /Exhibition および Rare Book Library について説明を受ける。2種類の Principia 初版本や展示用収集品などに実際に触れることができた。



【写真3】

History of Pain Collection/Exhibition
(Liebeskind Archives, UCLA)

7月21日午前-午後

UCLA Center for Information as Evidence において、Prof. Anne Gilliland-Swetland から Digital Archives の手法について Lecture を受けた。その意義、目的、実際、課題、等について重要なポイントがまとめられており、今後の実施方針設定に当たって具体的に活かしていくべき内容であった。

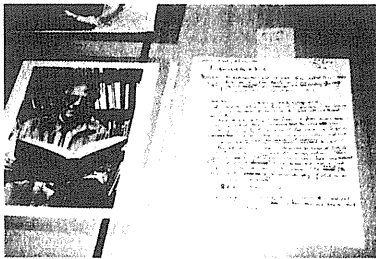
7月22日午前

後藤さん (Virginia Tech. / KEK) が、日本における戦後の素粒子論・高

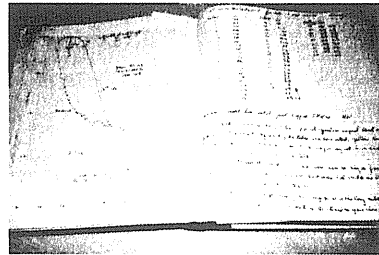
エネルギー物理の発展の歴史を国際協力の観点からまとめて、印象深い話をされた。（“Development of High Energy Physics in Postwar Japan”）

7月22日午後

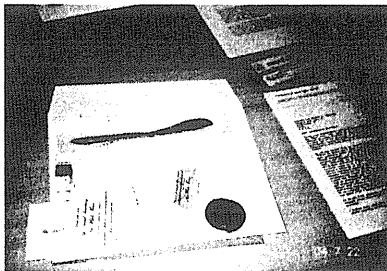
UC Irvine Library に向かい、Mr. William Landis (Manuscript Librarian) の案内で Special Collections and Archives の1つに属する F. Reines Papers を中心に Archives の保管、取り扱いの様子を視察した。会議室の机いっぱいに広げられた史料は、手書きメモ原稿からノーベル賞メダルまで含まれ、きわめて多彩であった。Savannah River Reactor での neutrino 測定に関する実験ノートや報告書類は、当時同様の研究をしていた高橋さんが熱心に内容をのぞき込んでいた。特に各種の収納箱、フォルダー、封筒、マイラー・カバー、作業用葉などの使われ方がまとめて見られたことは、現場の作業を理解する上で有用であった。



【写真4】 F. Reines Papers:
(写真および手書き原稿)

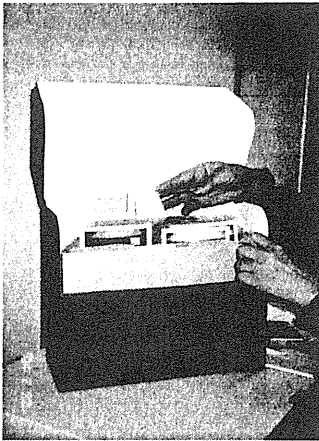


【写真5】 F. Reines Papers
(実験ノート)

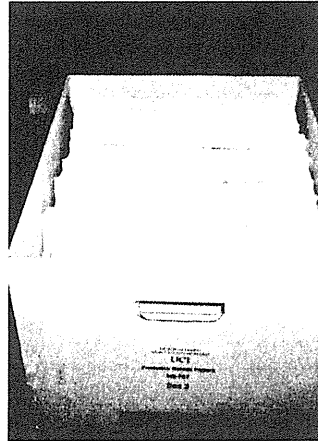


【写真6】 F. Reines Papers
(ノーベル賞メダル、手紙ほか)

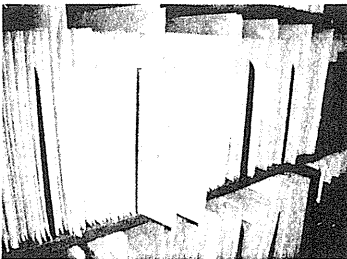
さらに、2階および地下の史料収納室の見学もでき、Library および Archives の機能に必要なスペースを実感できた。ここでは、digitized archives は扱わず、すべて原史料のままだというが、その検索には California 全体の研究用 Libraries を結ぶ OAC (Online Archives of California)での link により、外部からアクセスできるようになっているという。



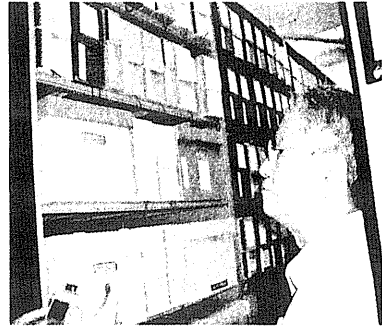
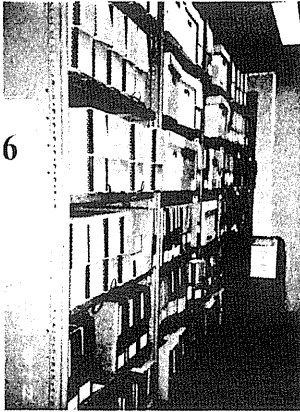
【写真7】 Metal Edge の小型保管箱



【写真8】「ACID FREE」の保管箱



【写真9】 収納状況
(整理作業中の資料の棚)



【写真 10、11】 Stock Room の棚 (UCI Library)
資料の大きさに合わせ、各種の箱が並べられている

7月23日午前

最終日の議論として、これからの Archiving Activities の進め方についての討議を行った。総研大からは、「日本国内の各研究機関に対して、それぞれの研究分野での Archives 整備を軌道に乗せていくよう、積極的に働きかけていく」旨の発言が、菅原教授からなされた。また、KEK や NIFS の具体的作業の支援 (Digital Archives, Oral Histories, 等の実施方策、予算と人員) をふくむ形で、Archives 計画の Strategy 検討が必要であることが討論の中で指摘された。さらに、この分野での国際協力の観点と若い世代の参加がますます重要になることを認識して会を閉じた。

7月23日午後

Down Town の Little Tokyo にある Japanese American National Museum (全米日系人博物館, JANM) を訪れた。John Esaki (Director, Media Arts Center, JANM), Daniel Lee (Curator, Life History Program, JANM), 山本恵理子 (Project Manager, Nikkei Legacy Project) の各氏から JANM が今年度から新たに始めている Oral History Program の説明を受け、具体的映像として Dr. Paul Ichiro Terasaki の Life History Interview の

Video (Feb. 10, 2004 採録)を見た。また、館内の一般展示（戦時中の日
系人キャンプ）を観覧した。

感想と課題：

今回のWSにおいては、米国の現場における実際の運用の様子に直接触れ
ることができ、日本におけるこれからの Archiving Activities の進め方
について参考とし、考慮しなければならない幾つかの点が明らかにされた
と考える。たとえば次のような課題が挙げられる。

(1) Digital Archives

- ・ Digitize することの意義の確認
- ・ Lifetime of Records, Materials の認識
- ・ Metadata の重要性,
- ・ Description Standards の選択 (ISAD(G) / EAD/…)
- ・ Finding Aids (Access の方式、Link の構成)
- ・ Expert の養成

(2) Oral History

- ・ Interviewee, Subject の選定
- ・ Procedure の吟味
- ・ Interviewee からの Legal Agreement 確認とテープの管理
- ・ Primary Document として研究・教育用の利用を図る

(3) Archival Management

- ・ Official System の確立 (各研究機関に必須)
- ・ 実績を積み上げて予算のバックアップを図る
- ・ 若手専門家(Archivist)の育成 (米国では special skill として広
く認知)

(4) 総研大の役割

- ・ Archives in Scientific Research の意義徹底 (科学、教育、社
会)
- ・ OAC (Online Archives of California) 的な Institutional Network

構築

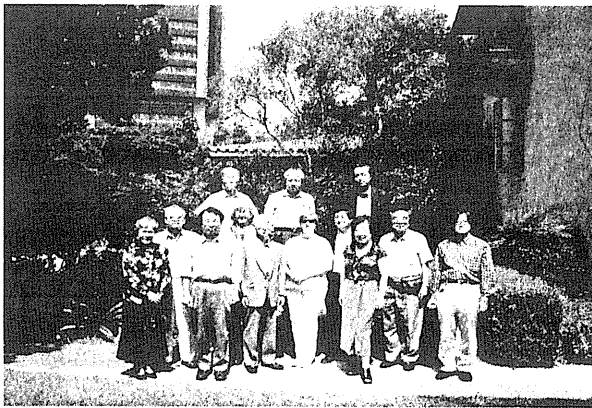
- ・ 若手に対する国際的トレーニングへの機会提供

全体を通じて感じたことは、史料の生成、収集、整理、活用のために、これまで日本の個別機関で手探りの形で進められてきた方向自体は、間違っていないこと、しかしその組織的な推進の方策については、先行する米国の豊富な実例・経験と開発的努力を十分取り入れていくべきだということである。そして、そこにこそ国際的協力・分野間協力の意義が見いだせるものと思う。

総研大がこの問題に積極的な支援を与えるという菅原教授の言明は WS 出席の関係者にとってきわめて心強いものを感じさせた。

最後に各訪問先で示された親切的な対応とともに、Professor Sharon Traweek の行き届いた精力的な Arrangements に対して、改めて深く感謝の念を表すものである。

なお、今回の WS 参加に当たっては、平成 16 年度科学研究費補助金（基礎研究（A）（2））「STS 研究の国際比較」〔課題番号（14208001）研究代表者 平田光司〕より旅費の支出を受けた。



【写真 12】 Workshop 参加者（Hershey Hall 中庭にて）